

**P-685** 当センターでの子宮癌に対する組織内照射症例の検討

大阪府立成人病センター

古元淑子, 天満久美子, 太田行信, 山本敏也, 木村 正, 上浦祥司, 佐治文隆

【目的】子宮癌に対する放射線治療は外部照射と腔内照射が標準的であるが、腫瘍径が大きい場合、子宮傍組織浸潤や骨盤壁浸潤が高度である場合、あるいは再発症例に対しては組織内照射が考慮される。しかしながら、組織内照射はまだ確立された方法とは言えない。そこで、組織内照射の効果と合併症を明らかにすることを目的とした。【方法】当センターで1996年12月より2002年9月に施行した組織内症例20例を後方視的に検討した。【成績】子宮頸癌症例は17例、うち再発症例は10例であった。子宮体癌症例は3例で、全例再発症例であった。子宮頸癌初回治療群7例中1症例のみ2期で術後子宮傍組織への浸潤を認めた症例で、その他は3期であった。組織型は扁平上皮癌が5例、その他は腺癌であった。著効例は5例で、全例局所再発を認めなかった(観察期間中央1年6ヶ月)。しかしながら、そのうち転移、癌性腹膜炎による死亡例を1例認めた。子宮癌再発症例治療群10例の内訳は0期1例、1期2例、2期2例、3期3例、不明2例であった。扁平上皮癌は8例でその他は腺癌であった。著効例は6例で、全例局所再発を認めなかった(観察期間中央1年1ヶ月)。そのうちリンパ節腫大により化学療法を追加しているものが3例あった。子宮体癌再発症例3例では、著効例が2例で、いずれも再発を認めていない(観察中央4ヶ月)。組織内照射全例、一過性の悪心嘔吐、下痢、膀胱症状は認めたが、重篤な晩期合併症は認めなかった。【結論】組織内照射は局所コントロールに対しきわめて有効な方法である。

**P-686** 婦人科悪性腫瘍に対する動体追跡照射の試み

北海道大

山本 律, 見延進一郎, 小林範子, 藤本俊郎, 武田真人, 渡利英道, 根岸広明, 櫻木範明

【目的】婦人科悪性腫瘍放射線治療において腔内照射が困難な場合がある。その場合に必要な侵襲的な組織内照射に変わり得る、高精度体外照射である動体追跡照射の有用性を検討する。【方法】動体追跡照射装置(リニアック治療室内に2台のX線透視装置を設置し、腫瘍近傍に留置した3個の金マーカーの3次元位置を、照射中に最高0.03秒毎に±1mmの精度で把握しながら照射)の精度を、通常の外照射の皮膚マーカーによる位置決めと比較。対象は2001年5月以降に、子宮頸癌・腔癌・腔断端癌で放射線治療適応かつ腔内照射不能で同意の得られた5症例。全骨盤に50Gy/25回/6.5週の外照射を行った後、3個の直径2mmの金マーカーを腫瘍近傍に経腔的に留置。3次元放射線治療計画装置により腫瘍重心と金マーカー位置を登録。治療室で通常の皮膚マーカーによる位置決めを行った後、動体追跡装置にて腫瘍重心の位置を補正し、3次元原体照射あるいは強度変調照射にて30-35Gy/6-7回/2週の追加照射。2ヶ月毎に治療効果と放射線障害の評価。【成績】従来の皮膚マーカーを用いたセットアップ法では左右、頭尾、腹背側の3方向においてそれぞれ中央値0.5mm(範囲, 0.2-0.9), 7.0mm(0.7-9.0), 6.0mm(0.2-7.8)のずれがあり、動体追跡装置による位置補正の有用性が示唆された。観察期間範囲11-15か月において全例に再発徴候は認められず、また早期・晩期ともに放射線障害を認めなかった。【結論】腔内照射不能例に対して、動体追跡照射法を用いることにより腫瘍位置に合致した適切な3次元線量分布の設定と放射線投与が可能となった。

**P-687** 放射線照射を併用した樹状細胞腫瘍内局注による癌免疫療法の試み

徳島大

古本博孝, 西條康代, 苛原 稔

【目的】腫瘍特異抗原が同定され、また最も強力な抗原呈示細胞である樹状細胞の誘導が可能になり、樹状細胞を用いた癌免疫療法が注目されている。今回、有効な治療法のない再発癌患者に対して、放射線照射によってアポトーシスを誘導した転移巣内に樹状細胞を局注する治療法の安全性と有効性を検討した。本研究は本学の倫理委員会の承認と患者からインフォームド・コンセントを得て行った。【方法】患者末梢血よりFicollを用いた比重遠沈法にて単核球を採取し、5%患者自己血清添加RPMI1640培地に浮遊させ37℃1時間静置し非付着細胞を採取した。3x10<sup>5</sup>/mlの濃度でGM-CSF(200ng/ml), IL-4(200ng/ml)下に6日間培養し樹状細胞として使用した。転移巣の1つに放射線を照射し、同日同部位に樹状細胞1~3x10<sup>7</sup>個を局注した。【成績】子宮頸癌(扁平上皮癌)の肺転移巣、子宮頸癌(腺癌)の皮膚転移巣、子宮頸部原発悪性黒色腫の鼠径リンパ節転移巣に対して同治療を各1回ずつ行った。副作用は局所の発赤、軽度の疼痛のみで重篤な副作用は認めなかった。しかし臨床効果は認めず、全例でPDであった。【結論】放射線照射を併用した樹状細胞の腫瘍内局注は安全な治療法であるが今回の施行条件では臨床効果は認めず、治療法の改良が必要であると考えられた。